

学都屋台食談

第2回
金城大学
学長

まえしま
前島伸一郎氏
しんいちろう

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、講師と学生が語り合う「学都屋台食談」を11月6日から11月19日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催しました。2006年から今年で13年目を迎えた食談で、講師が語ったメッセージを紹介します。

ある患者さんとの出会いが リハビリ医を志すきっかけに

今年4月に金城大学へ赴任する前は、長らくリハビリテーション科の医師(リハビリ医)として大病院に勤めていました。人手不足が叫ばれる産科医や救急医以上に数の少ないリハビリ医を志したのは、およそ30年前、脳外科の研修医時代に担当した一人の患者さんがきっかけです。当時は一例でも多く経験し、腕を磨くのに必死だったころで、ある晩、脳卒中で倒れた8代のおじいさんが運ばれてきました。「助けてほしい」。ご家族の強い願いを受け、緊急手術を行いました。しかし、手術後におじいさんの意識が戻ることはなく、寝たきりのまま療養型の病院に転院し、私の手を離れていったのです。

それからしばらくして、おじいさんの奥さんと娘さんが私を訪ねてきてくれました。「本当にお世話になりました。ありがとうございます。どうぞございます」。そう言って何度も頭を下げるご家族の姿に、きちんとサポートし切れなかった申し訳なきと何とも言えない悔しさがこみ上げてきました。この経験があったからこそ、最後まで患者さんに寄り添うリハビリ医を目指すようになったのです。

懸命な恩師の姿が 医師としての手本に

たった一つの出会いが、人生の転機になることがあります。皆さんも人との巡り合わせを大切にしてください。私にとっては、リハビリ医のいろはを教えていただいた恩師との出会いも貴重な財産です。

その先生は、「患者さんが困っていたら、何でもしてあげるのがリハビリ医だよ」と言い、受け持ちの範囲を越えてまで人に尽くす方でした。学生に講義をする際も、教える1コマの何十倍もの時間をかけて準備されていました。

なぜそれほどまでに一生懸命なのか、尋ねたことがあります。すると、先生は、「たとえ準備に10倍の時間がかかったとしても、その熱意を100人の学生に伝えることがで



参加
学生

前列左から北雪乃さん(金沢医科大学4年)、山下真由さん(石川県立看護大学4年)、後列左から小竹雄大さん(金城大学2年)、米田光希さん(金城大学4年)、村上達哉さん(金沢星稜大学3年)

きれば、何十倍も報われる。もし、その教え子たちが、さらに教える立場になって、その気持ち伝えてくれたら、何百倍も報われるんだ」とおっしゃいました。そんな先生の姿を間近で見られましたから、私も講義の準備ひとつでも決して手を抜きません。

皆さんの人生、これから先に何があるかはだれも分かりません。ただ、何をやるにしても、いつでも「全力投球」を忘れないでほしいと思います。

お互いに高め合える ライバルが大切

何事にも全力で向き合うためにも、若い時は良きライバルを持つといいでしょう。私の場合、医大を首席で卒業した同期がいました。診断や治療法について、彼は先輩に聞かれたことに何でもすらすらと答えていたのに対し、私はいつも四苦八苦。毎日、悔しい気持ちを抱えながら働いていました。

それでも決して下を向くことはなく、他の人の3倍働けば認めてもらえるのではないかと考え、どんな小さな仕事でも自ら買っ出て出るようにしました。当時は無我夢中でしたが、いま振り返ると、彼の存在があったから、医師として成長できたのだと感謝しています。

ライバルとは、決して足を引っ張り合う存在ではありません。お互いに認め高め合える同世代の競争相手を、皆さんもぜひ見つけてください。



講師

金城大学
学長

前島伸一郎氏

まえしま・しんいちろう

和歌山県和歌山市出身。藤田保健衛生大学(現・藤田医科大学)医学部卒業。医学博士。川崎医療福祉大学や埼玉医科大学、藤田保健衛生大学で教授を務め、2018年4月から現職。日本スポーツ協会公認スポーツドクター、日本リハビリテーション医学会専門医・指導責任者。日本リハビリテーション医学会代議員や日本高次脳機能障害学会理事なども務める。



金城大学